

会長この一年

SPring-8 上坪 宏道

日本放射光学会会長の任期が2年になったのは富家前会長の時からである。任期2年は「1年任期では慣れた頃には任期が終わるので十分な仕事ができない」という趣旨で始まったのではないかとと思われるが、実際に経験してみると、2年の任期にわたって当初と同じような緊張感で会長を務めることは至雉であることが分かった。その理由はいくつか考えられるが、その一つに地方にいと学会活動のための旅行に割く時間が増え、学会活動の時間が相対的に減少することが上げられる。こうして2年間の任期中に当初思ったようには職務を果たすことができず、大変残念に思っている。

私たちが今期の重要項目として取り上げたのは「学会の独自性の確立と財政基盤の強化」である。学会の独自性を確立するためには学会活動の強化が必要であり、それには年会や学会誌の充実や学会独自の行事を行うなどが求められる。学会誌については、現在編集委員会の努力で放射光学会誌の内容がたいへん充実してきており、外国人の寄稿も含めて読み応えのある解脱や報告が多くなっている。編集委員会では現在年5冊の刊行を6冊にすることを希望しているが、学会の財政状態との兼ね合いもあって今後の検討課題である。なお個人的には、会費を若干値上げしてでも学会誌の充実を図ることが必要であると思っている。

学会年会・放射光科学合同シンポジウムは本年は播磨科学公園都市で開催された。学会の参加者数は地理的条件もあって昨年に比べて若干減少したが、HISORやSPring-8など新しい放射光源が稼働し始めたこともあって、内容的には充実していたように思う。

98年は学会創立10周年であり、それを記念して「日本放射光学会10周年記念フォーラム」講演会を開催したが、

放射光利用の最前線のトピックスを十分時間をかけて行った講演はたいへん好評であった。また、第2回「放射光と材料科学」国際会議をSPring-8と日本放射光学会の共催で神戸で開催した。この国際会議では会長が組織委員会の共同議長であり、会議の冒頭に日本放射光学会長の挨拶も行われた。

今年度に特記すべきことは「真空紫外・軟X線放射光施設建設に関する要望書」を、日本放射光学会名で文部大臣宛に提出したことである。評議員会で承認された要望書を会長、菊田元会長および佐藤次期会長の3名が文部省国際学術局研究機関課を訪れ、研究機関課長及び調整官に手渡した。その際1時間以上にわたって要望事項を説明したが、残念なことに来年度の予算措置を実現するには至らなかった。しかし我が国における放射光科学の発展のためには、日本放射光学会が随時このような活動を行っていくことも必要であろう。

学会財政基盤の強化は会計幹事を中心に進められた。その結果、これまで学会事務をお願いしていたワーズ社に事務経費をきちんと支払う、年会・合同シンポの運営に関する学会の寄与と責任を明確にするため予算を一つにまとめる、会費滞納を減らすことなどが、評議員会の承認と協力の下に行われた。会員及び賛助会員を増やす努力は続けたが、昨今の経済情勢から賛助会員数は減少傾向にある。いっぽう、正会員の数は新しい放射光施設の供用開始に伴い増加しているため、今後は正会員を増やすことに重点を置くのがよいであろう。

学会の若手奨励賞は今年度該当者なしの結果となった。来年は若手研究者から優れた研究成果が出ることを期待したい。